博物館アラカルト⑥

不如学也　―学ぶに如ざるなり―

試験が近づくと普段よりやる気を出して、夜更かしした経験。皆さんにもありませんか？

しかし、そうした努力が報われたことは稀であったように思います。

神辺に私塾・黄葉夕陽村舎を開いた菅茶山のもとには各地から塾生が集まり日夜勉学に励んでいました。こうした塾には、その塾の教育目標や学生心得などが掲げられていることがあります。南宋の朱熹（朱子）が白鹿洞書院を再興する際に定めた学生心得である「白鹿洞書院掲示」などが有名です。

阿部正精書『不如学也』

黄葉夕陽村舎は、寛政八年（1796）に藩の郷塾として認められ、以後廉塾あるいは閭塾などと呼ばれるようになりました。

写真の「不如学也」は、その廉塾に掲げられていたと考えられます。頼山陽の「菅茶山先生行状」のなかに「先生は藩に請うて、登せて郷校と為し、名づけて廉塾と曰う。柴博士その扁を書す。のち藩侯親から不如学也の四字を筆して之れを掲ぐ」という記述があります。

「棕軒書掲於神辺駅閭塾」＝福山藩第五代藩主・阿部正精（1774～1824）が、「文化甲子秋九月」＝文化元(1804)年九月に書されたものとわかります。正精は、儒学・国学のみならず蘭学・天文学など、広汎な学問奨励を行うなど好学の藩主でありました。文化元年は、正精の命により、藩儒となっていた茶山が初めての江戸へ出府した年です。1月末に神辺を出立し、2月下旬に江戸へ到着、10月中旬に正精に従って帰郷のため、江戸を立っています。

「不如学也」の出典は『論語』の「衛霊公第十五」にある「子曰く、吾嘗て終日食らわず、終夜寝ねず。以って思う。益無し。学ぶに如かざるなり。」意味は、「一日中食事もせず、夜も眠らずひたすら思索にふけったが全く意味を成さなかった。地道に学ぶこと＝読書にはかなわない。」といったものです。日頃の積み重ねがいかに大切かということですね。

私たち学芸員の仕事もまさに「不如学也」であると肝に銘じて地道な努力を重ねていきたいと思っています。